

---

# 宗教心理学研究会ニューズレター

第3号 2005.3.10

宗教心理学研究会  
*Society for the study of psychology of religion*

---

## 目次

第2回研究発表会報告 -----	報告 岡村宏美	1
第2回ワークショップに参加して -----	杉山幸子	8
第2回研究発表会に参加して -----	西脇 良	8
ワークショップに参加して 宗教心理学の研究手法 -----	堀江宗正	11
特集1:「宗教心理を研究すること」に対するリプライ -----		13
宗教の心理学的効用 -----	齋藤耕二	13
「宗教心理を研究すること」に対するリプライ -----	高橋正実	14
宗教心理学を研究すること -----	仲野好重	17
「宗教心理学」にコミットすること--レスポンスに代えて -----	深澤英隆	18
特集2:今後の宗教心理学研究会における活動・運営について -----		19
宗教心理学の社会貢献とは -----	ミカエル・カルマノ	19
今後の宗教心理学研究会における活動・運営について -----	河野由美	20
今後の宗教心理学研究会における活動・運営について -----	西脇 良	22
事務局からのお知らせ -----		24

---

## 第2回研究発表会報告

報告 岡村宏美(神戸大学大学院)

2004年9月12日、日本心理学会第68回大会ワークショップにおいて、宗教心理学研究会第2回研究発表会が行われた。多くの方々が集う中、宗教心理学の研究手法の検討をテーマとして研究発表会は開始された。まず司会の松島公望さんより、今回の研究発表会の企画者、話題提供者、指定討論者の紹介があった。その後、杉山先生による話題提供から研究発表会は開始された。

[話題提供]

### 1. 質的アプローチによる宗教研究の試み:杉山幸子先生

杉山幸子先生の研究歴を振り返りながら質的アプローチに関する話題提供がされた。

心理学研究の中心的な方法として質問紙を用いた統計的な研究がある。宗教心理学研究の発展にあたり、質問紙法を用いることは、心理学的研究の主流の方法の論文を多く書く事での発展 多領域との共同研究において統計という形での寄与

をすることによる発展という意味で重要である。しかし、宗教というテーマを扱う上で質問紙法が必要十分であるとは言いがたく、最近心理学の研究法として注目が高まりつつある面接や観察等による質的アプローチの重要性を感じている。これまで行ってきた研究の方法を振り返りながら、宗教心理学の方法としての質的アプローチについて考えてみたい。

宗教心理学の「方法」としては質問紙、観察、参与観察、面接、実験、自伝等の分析等がある。また分析としてはエスノグラフィックな分析、ケーススタディ、談話分析等がある。卒業論文では面接を、修士論文では参与観察を用いたが、方法論に関する自覚をもってはじめていたわけではなかった。しかし、自分が新宗教に対して全くのエイリアンであったことを考えると、やはりここを入り口にするしかなかったと思われる。卒業論文ではモルモン教と創価学会の信者に面接し、入信プロセスの語りの比較を行った。反省点としては研究当初はその人の入信過程を生活史、即ちライフヒストリーに注目していたが、研究が進むにつれその人の語るその人自身の物語、即ちライフストーリーに特徴を見出し、まとめる際に両方の視点が混在してしまった点である。

その反省から修士論文ではライフストーリーが作られていく過程に注目し、参与観察によって真光における道場のお浄め場面の対話によって信者を社会化していくプロセスを見た。参与観察の反省点としては文脈に対する目配りをしてその「場」に関する記録(写真、見取り図、そこに集う人々の人数や人口統計学的な資料等)を十分にとれなかったことである。参与観察は本来「参与者であり、かつ調査者である」筈が、なるべく参与者としてそこに「溶け込んでいたかった」ため、調査者としての資料収集が不可能であった。その結果、成果を投稿論文としてまとめることができず、そこからの転換を図って質問紙調査を行うことになった。

質的研究の論文の執筆にあたって、心理学の論文として投稿することを考えた場合、「客観性」の問題が非常に重要である。質的なデータにもとづいた議論が説得力をもつためには、1. 量的研究

における妥当性に代わって必要とされる文脈の把握、2. 研究者の価値観、信念、先行経験、社会的アイデンティ等が研究にどう影響したか自らの立場を明確にする事、またリサーチクエスションが研究をどう導いたのか、研究デザインや分析方法がどのように研究を構成したのかを洗練された形で示す事＝リフレキシビリティは特に宗教心理学的研究においては量的研究でも質的研究でも非常に大切である。

## 2 宗教と死生観：渡部美穂子先生

渡部美穂子先生からは心理学的研究の中心的研究方法である「質問紙法」に関する話題提供がされた。

宗教への態度が影響に及ぼすという観点から研究を質問紙によって行っている。経験が態度を形成することはいうまでもないが、宗教行動が宗教観を形成しており、更にその宗教観が死にも関係していることがこれまでの研究でわかっている(渡部・金児, 2004)。このことから、死への態度研究における宗教観の重要性は明らかである。現在はこれまで日本人の死生観の心理学的研究で主になされてきた「自己の死への態度」と共に「他者(一般的な意味ではなく、自分にとって意味のある重要な他者)の死への態度」をあわせて研究している。宗教観と共に、自分にとって大切な人を失う経験こそが、自らの死への態度を形成するものとなるのではないだろうか。本研究発表会では現在得られているデータの分析をもとに報告を行う。

調査対象者は大阪市立大学の学生625名で講義時間中に集合調査をおこなった。「あなたはこれまでに身近な人をなくした経験がありますか」という質問によって喪失経験のあるなしと、「修養行動」「慰霊行動」「現世利益」の3因子からなる宗教行動との関係をみた。その結果、慰霊行動のみ喪失経験がある人のほうがない人よりも有意な差を示した。また喪失経験のあるなしと宗教への接近的態度を示す「向宗教性」、おかげの概念を表す「加護観念」、たたりの概念を示す「靈魂観念」からなる宗教観尺度との関係をみたところ、経験のあるなしでは有意差が出ず、性差のみ有意差が出た(全て女性男性)。また、「経験がある」と答えた人には

その中でも最も印象に残った人を答えてもらい、その人の死についてどう思うかをたずねた。「経験がない」と答えた人には現在もっとも大切な人を回答の後、その大切な人の死についてどう思うかをたずねた。その結果、経験のある群は、祖父母、ペット、親友恋人の順に、経験のない群は、両親、親友恋人の順となった。自分の死、他者の死への考えを測る死観尺度は「恐怖」「苦痛」「浄福な来世」「消滅」「人生の集大成」「逃避」「未知」「ニヒリズム」「生の証」の8因子に分かれた。喪失経験の有無による他者の死観、自己の死観の違いをみたところ、他者の死観では5%水準で「恐怖」、「浄福と未知」、「消滅」、「生の証」については経験のない人がある人よりも高い値を示し、「浄福」、「虚無」については経験のある人がない人よりも高い値を示した。自己の死観に関しては10%水準の有意傾向として、「逃避」は経験のない人のほうがある人よりも高い傾向を示し、「生の証」は経験のある人のほうがない人よりも高い傾向を示した。また喪失経験別に自己の死観、他者の死観を目的変数とする重回帰分析を行ったところ、喪失経験のある人とない人ではパターンが異なることが分かった。

喪失経験のある人の印象に残った人として祖父母が7割を占めていたが、どれほど身近なのか、また時期等が定かではないため、より身近な対象として「家族」を設定した。喪失経験のある人がかつ家族を亡くした人と、喪失経験のない人がかつ大切な人として家族を思い浮かべた人の宗教行動の違いをみたところ、慰霊行動だけでなく、修養行動にも差が見られるという興味深い結果となった。

近しい他者の喪失体験が宗教行動にも影響しており、それが宗教観、他者への死観、ひいては自己の死への態度形成に結びついているというモデルを今後も更に検討していく。

### 3. 形態素解析ソフトを用いた自由記述回答の分析: 西脇 良先生

西脇先生からは新たな分析法である「コンピューターコーディング解析法」に関する話題提供がされた。

従来、面接調査の逐語録や自由記述回答等の質的データ(言語データ)は、分析にあたってコーディ

ングに多大な時間と労力を要する等の問題点が指摘されてきた。しかし近年言語データの分析をおこなうことのできるコンピューターソフト(形態素解析ソフト)が開発され、宗教研究の領域でも、ソフトを使用した研究例が紹介されるようになった。分析にコンピューターソフトを用いるメリットとしては、処理スピードが向上する、分析の一貫性および厳密性が高まる、データの管理・共有が容易になる等の点が挙げられる。しかし一方で、言葉がもつ微妙なニュアンスや使用文脈までを知ることは現在ではできない。しかし、研究目的と合致し、かつデメリットを他の方法で補うことができるならば、コンピューターソフトの利用は質的研究の質の向上に繋がると考えられる。本発表では、研究におけるコンピューターソフト利用の実践報告を行う。

現在、発表者が取り組んでいる研究課題は「子どもの宗教性発達」である。とくに「子どもを取り巻く宗教的環境の把握」から研究をはじめている。まずは宗教的環境という事象の多様性を念頭に置き、発達しつつある個人を取り巻く環境について、なるべく多くの情報を得て、情報を整理し分析することで、発達に関与する環境構造を浮き彫りにすることが、研究の目的である。

この研究目的にかなう方法の一つとして、自由記述法を用いた調査を実施した。自由記述法は、あらかじめ設問および回答項目を決定しておく質問紙法に比べ、ある設問に関する量的データはそれほど期待できない。しかし一方、テーマをめぐる多様性に富んだ情報を、研究者もしばしば気づかないような情報を含めて得ることができる。調査ではまず、第一段階としてある程度の発達をしている青年期の人々に、自らの宗教的環境を振り返ってもらい、それを自由に記述してもらうことで、情報を得ることとした。得られた自由記述回答について、形態素解析ソフトを用いて分析を試みた。形態素とは意味を持つ最小の言語単位、即ち単語と理解する。使用したソフトは、フリーソフトであり、入手が容易かつ開発者のサポートが万全という点から樋口耕一(大阪大学)が開発した「KHCoder」を用いた。

調査時期は2003年4月で回答者は宗教系(カトリ

ック)大学に通う大学生166名、うち女子105名、男子60名、不明1名であった。平均年齢は18.42歳であった。(女子は18.17歳、男子は18.84歳)手続きとしてはA4ないしB5サイズの用紙を各1部配布し、「これまでの生活を振り返って、幼少期から現在にいたるまで、どのような宗教的環境のもとで育てられたか、自由に思い出して、自由に書いてみてください」と教示して、回答を求めた。また、記述を促すため、仏壇や神棚があるかなどの具体例をつづけて教示した。文字数に関しては全体平均が299.03文字で女子平均が268.77字、男子平均が160.62字で女子のほうが男子より多い結果となった( $t(160.4)=7.33, p<.001$ )。

KHCoderを用いた分析では事前準備として自由記述回答をテキストファイル化した。この過程で文書を読み返すことで、集中してデータに接近することができる機会ももてる。またこの段階で、「おばあちゃん、祖母」を「祖母」に統一するなどある程度の表現統一も可能である。また回答者の識別番号や属性(性別、年齢等)に、符号をつけておく。次にソフトのインストールが必要である。KHCoder本体のほかに、日本語形態素解析システム(単語抽出のため。ソフト名は「茶筌」)、リレーショナルデータベース・システム(単語検索のため。ソフト名は「MySQL」)が必要である。分析では単語抽出と頻出語の表示を行った。本ソフトでは23の品詞体系に自動的に分類される。ここでは、名詞動詞形容詞副詞を中心に、19品詞に限定して抽出した。固有名詞は強制抽出機能を使用することで対応できる(eg.「ものみの塔」「おぢは帰る」)。結果1643語(延べ9468語)を抽出した。頻出語も表示可能である。

次にコーディングルールの作成をする。抽出された単語を用いてコーディングルールを簡単に作成できる。「神棚、仏壇」のいずれかがみられる回答にコード名「神棚・仏壇」をあたえたい場合、演算子 or を用いて「神棚 or 仏壇」と記述すればよい。結果「神棚・仏壇」該当者は150名(「神棚」102名「仏壇」135名)となった。

次にコード作成とクロス集計をする。たとえば、単語「おみくじ、占い、星占い、お守り、星座、絵馬

破魔矢」のいずれかがみられる回答にコード名「占い・縁起物」をあたえる。次に、ジェンダー×「占い・縁起物」のクロス集計表を作成する。結果「占い・縁起物」該当者は、女子の方が男子よりも多い結果となった。また、コード間の関連をみることができる。コンコダンス機能を用いたのマニュアルコーディングではたとえば、宗教系学校への通学の有無、学校での宗教の扱いやエピソードの有無を知りたいとき、まず、関連する単語をまとめてコード名「学校」を作成しておく「学校」に該当する回答のみを読みながら、こまかな内容についてコーディングをおこなうことができる。単語だけでなく文脈のひとつひとつにあたることができ、紙での作業よりも能率がよい。多変量解析用データへの加工も可能である。

KHCoderは、形態素解析システムを用いた単語抽出および検索の機能のほか、クロス集計や類似性の分析、多変量解析用データの書き出し、等多くの機能を備えている。言葉のニュアンスや文脈の理解についても、文書閲覧機能を用いれば、分析もよりスムーズである。ソフトのインストールと機能の理解には多少時間がかかるが、参与観察やフィールドワークなど言語データを多く使う質的研究の分析の際にもコンピュータソフトによる解析も有用であろう。

#### [発表の「事実確認」に関する質疑応答]

菊池先生より杉山先生の発表におけるライフヒストリー(歴史的事実)とライフストーリー(物語的真実)の物語的真実とはどういうものかという質問があった。これに対し杉山先生からライフヒストリーは史実であり、ライフストーリーは事実かどうかという事ではなく、他者との関わり、対話を含めて本人が自分の人生においてどのような「物語」を作るかであるが、両者を区別するのは非常に難しく、視点が混同しやすいため論文を書く上で問題があるという回答があった。

#### [指定討論]

##### 1. 宗教的・宗教心理学の立場から：堀江宗正先生

指定討論者の堀江先生からは、個々の発表に対するコメントと問いかけがなされた。

杉山先生の発表に対しては、宗教心理学にふさわ

しい研究法として改めて質的研究と量的研究のメリット、デメリットを簡単に明らかにしておきたい。また客観性の問題において質的研究においても量的研究においても調査者自身のリフレキシビリティとその開示が重要であると考え。特に宗教研究においては調査者のもつ概念(そもそも宗教という概念そのものに問題がある)やカテゴリーそのものに対象への先行理解が含まれてしまう。しかしそれを排除する形ではなく、対象との接触を通じて調査者の持っていた先行理解がどう変わっていったのかを反省的に開示することが必要である。

次に渡部先生の発表に対して以下のようなコメントがあった。宗教という言葉は問題を含んでおり、これによって現代日本人が身構えてしまい、躓きを与えてしまい、本来研究者が大切にしている宗教性が消えてしまう危険性がある。また、重要な他者の死として印象に残っている人として祖父母をあげている人が多くいたが、重要な他者の死でさえ、核家族で育った若者にとっては身近ではなく、若者を対象とする場合は同居家族の死に研究を限定すべきではないか。死生観を形成するほかの規定因として、加齢、親の死などのさまざまなライフイベントも関係があるのではないか。質問としては、今回のテーマである宗教心理学の研究手法という側面からは本発表はどのようなことが言えるのか。

次に西脇先生の話題に関しては以下のような質問とコメントがあった。この研究は質的研究なのかどうか。質的研究を量的研究で補強しているのか。本研究のように、短い回答で大人数に聴いて単語の分析を回答者全体でならしてしまう形は「個性記述的」ではなく「法則定立的」ではないか。量的研究と質的研究はどちらかを否定するものではなく、縮尺の違いとして捕らえ、マクロ的研究とミクロ的研究で、時にはマクロでありミクロ的研究、もしくはその反対もある。テーマや研究レベルによって方法を使い分けるべきであり、それだけでなくどのようなトピックが重要なテーマとなり、どのような方法が適切化を整理していく必要があるだろう。今日の発表ではなく宗教心理学的な研究は今日的意義

のへの感受性が宗教学に比べて薄い印象があり、広い社会の中で研究がどのような意義を持っているのかを考えていくことが大切である。自身としては教団に関係ない個人の宗教性に興味を持っており、どのように自らの宗教性を語っていきけるかという点での研究をしていきたいと考えている。

## 2 心理学的宗教心理学の立場から:金児曉嗣先生

金児先生からは心理学的研究法として量的研究と質的研究についてコメントがなされた。

これまで質問紙法を主に用いてきた身として量的研究と質的研究を同一個人の中でやるのが可能かどうかという疑問がある。もともと宗教における質的研究というのは宗教学でなされてきたことであり、自身も研究をやっていく上で宗教学の質的研究から量的研究の仮説を考え、相互作用の中で研究を行ってきた。宗教学でも量的研究を無視するのではなく、これまではなされてこなかった尺度化や数量化において、心理学側からの働きかけにより相互に助け合うことが効率的でないかと考える。量的な分析は個人の宗教生活のリアリティが描かれぬという最大の欠点がある。たとえば渡部先生の研究では個人的な宗教生活、個人の死生観といったものはまったく分からないがこれは仕方がないことであり、研究の関心がどこにあるかという点で個人のリアリティに着目した個性記述的な形をとるのか、それとも法則定立的な立場をとるのかということの問題であり、お互いが相互に助け合えばよいと考える。たとえばW.ジェームズが宗教的回心の研究において個性記述的研究を用いたが、その弟子のスターバックは師匠とはまったく違う形で研究を行った。ジェームズはその著作の中でスターバックの研究を度々引用しており、方法の違いをうまく利用した。個性記述的を蓄積していくことで法則定立的なものを確立していくこともひとつの方法であると考えているが、正しいか正しくないかというよりは好みの問題として、自分自身としては宗教学がこれまでやってきた分野をあえてとらず、法則定立的なやり方をとりたいと思っている。しかし宗教という現象を考えていく上で質問紙にも限界がある。法則定立的、といっても因果関係については明確には言えず、推測性

しくはモデルの検証を行うことしかできない。

むしろ杉山先生の方法論にもあったとおり、実験準実験を用いて法則定立的な研究をしていくこともできるのではないか。過去に行われた「入棺実験」という実験がある。これは私たちの死に対する恐れ、恐怖が宗教的儀礼によって和らげられるのかというものである。統計では宗教的儀礼の参与度と死に対する恐怖の二変数間の関係しか見ることができない。しかし実験では、実際に棺の中に被験者が入り、周囲の人がお坊さんや親族、友人などいろいろな役割をして棺を取り囲み、お葬式のシュミレーションをしてみることで、棺の中に入る経験をした人としなかった人では死に対する態度が持続的に変化していくことが分かった。以上のような実験のように、アイデアをいろいろなところから集めてきてユニークな実験なり研究をしていくことができるのではないか。これまで自分がとってきた手法が宗教心理学的研究において適切ではないとは考えていないが、結論的には量的研究、質的研究がお互いに自分の仮説なり理論構築なりに生かしていけばいいのではないかと考えている。

西脇先生の発表に関しては量的研究ではないかと感じている。またコーディングの際に宗教学的な言葉の判断が難しいように感じる。誰から見ても宗教学的な言葉であるというものもあるだろうが、専門家が見ると一見非宗教的な言葉でも宗教的意義を感じるものもあるであろうし、逆に一見宗教的な言葉がみても宗教的意義が見いだされないこともあるだろう。誰が判断するのかという点もあるだろう。どのように考えていくべきか。

#### [星野命先生からの講評]

最後に金児先生より星野命先生による「まとめ」のお願いがあり、星野先生からお話があった。

父が内村鑑三の弟子という事、また小さい頃から日曜学校に行くなどして親しみをもっていたこともあり、1952年前後から東大の心理学教室で心理学の講義や実験演習だけでなく、宗教学にも興味を持って授業を受けていた。その中で宗教学と心理学の関係の深さを感じた。アイワナの大学院ではアーミッシュという宗教集団の研究を行っている

マンフォード・クーム先生により「20答法」を教わり、日本でも用いた。この尺度は最近の日本での研究でも行われているが、統計法でもなく、質問紙でもSCTに近いものである。この尺度を宗教行動や態度の研究に使うべきではないか。自叙伝の主なトピックが全て含まれており、先日の心理臨床学会のワークショップではこの20項目の尺度を書いては少し置いてまた20項目書くという形で実施すると次第に自分の事について書くことがなくなってきたという事が起こり、書いていく中で宗教性が自然に出てくるかもしれないと考えている。国際基督教大学ではプロテスタント教育の学校の生徒の宗教性に関する調査を宗教教育のみではなく俗信や民間信仰も含めて行った。特定の宗教教育効果も宗教心理学の研究に入るのではないかと。

最近の関心では、本日発表のあった死生観も面白いが、「モラル」についての研究について興味を持っている。西洋では宗教がモラルと結びついているが日本ではそれを宗教とは切って「道徳」という形で行っている。モラルという言葉が既に日本で社会権を獲得している為、モラル研究という形で家族や地域ではぐくまれた宗教性を見ることができるのではないかと考えている。また、宗教性の中にマリアへの気持ちに近いものがあるという「甘え」の研究を松本先生がしている。日本心性の中に広くいわたっている概念から宗教性を見ていくことも大切ではないか。

#### [フロアを含めた質疑応答(討論)]

杉山先生からは堀江先生からの質問である「質的研究と量的研究のメリットデメリットについて」に対して以下のような回答があった。金児先生から「研究者の好みである」との事、そのとおりだと思う。現在の自分の好みは質的研究である。これは自分としてはあまり知らない所、自分と縁遠い所に飛び込んでいき、素朴なところから問題意識を考えていく事から研究を始めたいと思っているからである。この場合、質的研究の方法をとらざるを得ない。その後、ある程度つかんだ後量的研究に移っていくという形をとっている。宗教心理学の研究者の西脇先生もニューズレター2号に書いていたように個人的に宗教に携わっている方が多く、長く

参与観察をしているようなものなので、量的研究に入っていくのではないか。メリットデメリットに関しては難しいが、個性記述的か法則定立的かということでは質問紙は法則定立的ではなく、記述的に用いられているように思う。質問紙作成前段階でどのようにカテゴリーを分けたか、など質的研究、量的研究のどちらもが必要なのではないか。法則定立的にはやはり金児先生からもお話があったよう実験、準実験がふさわしい。宗教心理学的研究の中でこの手法が盛んになっていけば、と考えている。

渡辺先生からは堀江先生からの質問である「今回のテーマである宗教心理学の研究手法という側面からは本発表はどのようなことが言えるのか」に対して以下のような回答があった。

もともと宗教を研究しようとしたのではなく死生観を研究する中で宗教が現れたという形が正しい。しかし研究の中ではオウム以降の宗教観にはあっても日本人の心の中にある宗教性が重要であると考えており、またデータとしても得られている。それらのデータを得るために質問紙を用いて大量の人数にとることが、モデル構成のためにも大切である。堀江先生からも指摘があった対象の問題や他の規定因については更に質問紙を用いて研究を行っていく予定である。

西脇先生からは金児先生からの質問である「質的研究よりも量的研究をしているのでは」に対して以下のような回答があった。

金児先生のご指摘のとおりであると思う。堀江先生の「質的データを量的データに還元している」という表現がぴったりしている。しかし数字で最初から得られたデータに比べ、入力過程の中で文と接触し、頭の中で質的な動きが起きていることを補足しておきたい。

次にフロアより様々な意見が述べられた。

武田先生より今回の研究会について感じたことを述べられた。堀江先生からもあったが、もう少し単刀直入に考えなければならぬこととして、今回の研究発表でも第一発表では「宗教」、第二発表では「宗教行動」、第三発表では「宗教環境」と既成の宗教が関わるところというニュアンスが強いよう

に感じた。しかし宗教学的な考えからは「既成の宗教ではなく、人間存在に共通する宗教性を大切に考えている。既成宗教それ自体が人間に共通する宗教性にとって邪魔になっているのではないか。堀江先生も「宗教」という言葉が現代日本人につまづきを与える」としているが、世界的にもこのようなことが起こっている。既成宗教が嫌われているように、宗教心理学もマイナーになってしまう危険性があるのではないか。堀江先生からはそれに加え以下のような意見があった。宗教心理学的研究というのは「宗教」を「心理学的」に研究するという形と「宗教心理」を研究する形がある。「宗教心理」に関しては歴史的にみて個別の宗教や集団宗教をみたのではわからないところがある。宗教心理学的研究をマイナーにしないためにも「教団＝固定的」ではなく個人の宗教性の「流動性」、「かわりやすさ」や歴史的な問題をテーマに考えていく必要があるのではないか。

奈良女子大学の森岡先生からは以下のような意見があった。質的か量的か、という議論よりも経験の意味の問題が重要であるとする。ナラティブアプローチでの宗教の問題では体験の意味づけにおいてどのように扱っていくのか考えていく必要がある。

九州東海大学の先生からは以下のような意見があった。人間の持っている宗教性を扱うこととの大切さに興味を持って本研究会に参加した。市大の神経心理学で脳死の問題を扱った際、「自分の体が灰になっても自分というところは存在するか」という問いを学生にしたところ、若い人が関心を持っていることがわかった。宗教心理学は「自分の存在はどこから来てどこに行くのか」「どういう意味を持っているのか？」という現在の若者も深く持っている認知欲求をまともに取り扱っていく必要があるのではないか。

甲南大学の藤島先生からは今回の研究会に関して、次のような意見があった。研究におけるリアリティとして、エミック、エティックのアプローチなどの議論が今回は出なかったこと、またより確証的な方法論をもう少し具体的に今後は考えていきたい。

## 第2回ワークショップに参加して

杉山幸子

昨年に引き続いて話題提供者を務めさせていただきましたが、今回は前もって発表の材料があったわけではなく、以前から気になっていた「方法」がテーマでしたので、これを機に自分の考えを少し整理してみたいと目論んでおりました。しかし、やはり手強い問題だったというのが終わってみての実感です。様々な方法を比較検討したいと思っていたのですが、結局は自分のささやかな研究の反省に終わってしまいました。そのことをまず反省しなくてはいいけません。方法としては観察や面接に力点を置いて話しましたが、強調したかったのは質的vs.量的という問題ではなく、すべての研究の大本には観察があること、そして観察データがもっと論文に表されても良いのではないかということであり、そのために重要な条件のひとつとしてリフレキシビリティを挙げました。これまで日本では瞑想の研究を除いてはほとんど行われていない実験法による研究なども待たれますが、社会学や宗教学の方だけでなく、心理学の研究者によるフィールドの記述をもっと読みたい、と言ったら、ちょっと趣味的な発言になってしまうでしょうか。

研究会として行うワークショップは2回目になります。その良さは発表者とフロアの距離が小さいことだと思います。他の話題提供者の興味深い発表が聞けたこと、指定討論者からの鋭いコメントをいただけたことありますが、何よりも初日の午前中という時間帯にも関わらず集ま

って下さった方々と(ほんの少しですが)討論することができたことで、充実したひとときでした。西脇さんの発表につきましては、その後で刊行されたご著書を読んで、この膨大なデータ処理の体験から出てきた方法であったかと改めて合点がいきました。コンピュータ・ソフトを用いた分析方法は質的というより量的的手法ではないかという意見が多かったようですが、技法としてはそうかもしれませんが、西脇さんの視線が抽象化ではなく内容の記述に向いているという意味で、質的研究に通じるもののように思われます。

フロアの方との討論の中では「スピリチュアリティ」への注目が印象に残っています。最近、日本でもスピリチュアリティに冠する書物が相次いで出ていますが、研究会としてもその概念に積極的に取り組む必要性が感じられました。

さて、今回のワークショップに望んでのひそかな目標は、新幹線の都合で途中退席した昨年の心残りを解消すべく、「懇親会に最後まで参加すること」でした。参加者がやや少なかったのは残念でしたが、硬軟取り混ぜた話題で盛り上がることで大満足です。日頃、「社会」心理学を学ぶ者とは思えないような引き籠もった生活をしておりますので、大阪の地で西の方のお話を聞くのは楽しい経験でした。来年はぜひ、より多くの方々と言葉とお酒を交わしたいと思います。

---

## 第2回研究発表会に参加して

西脇 良(南山大学)

昨年9月におこなわれた宗教心理学研究会の第2回研究発表会は、3名の話題提供者と2名の指定討論者を迎え、フロアを交えての意見交換もなされるなど、大変有意義な集会であった。メインテーマは第1回に引き続き「宗教心理学的研究の展開」であり、この分野での研究が活性

化されるために必要と考えられる基本的な諸問題に取り組もうとするものであった。とくに今回は「宗教心理学の研究方法」に焦点が当てられ、各々の調査研究経験をふまえた話題提供に沿って、活発な討論がおこなわれた。以下、短く感想を述べてみたい。



杉山幸子さん(話題提供者)は、量的研究法と質的研究法それぞれの長所短所を、ご自分の研究経験をふまえて指摘された。質的研究法の可能性に期待を寄せながらも、様々な制約を受けて苦労した研究プロセスが率直に語られ、大いに共感するところがあった。また、調査者の基本的な構えや調査対象とのかかわり方について詳細な開示をおこなうことにより研究の客観性を確保すべき、という提言も、方法論上大切な視点であると思った。この点に関連することであるが、参与観察について、1人の研究者による視点だけではなく、複数の観察者による複数の視点も考えられるように思われた。筆者の大学院での経験(発達臨床や幼稚園での参与観察)では、複数の観察者が対象となる子どもたちにかかわるのが通例であった。また、マジックミラー越しにセッションを観察する者もいた。セッションが終わった後、複数の観察者が観察したことをお互いに報告しあい、討論をおこなった。さらにケースカンファレンスでは、対象者を実際に観察してはいないが豊富な臨床経験をもつ者が、報告事例に対する解釈を加えていた。これらは臨床分野では研究の前提となる方法といえようが、この方法を参与観察に取り入れれば、1つの事象に対して複数の視点や解釈が成り立つことになり、ひいては、質的研究の客観性の問題に或る程度まで応えることにもなるであろう。研究者の数の面で限界があるだろうが、たとえば、2人の研究者が互いのフィールドに交互に参加しながら観察してみる(もちろん調査対象者からの快諾が必須条件となる)ことから始められるかも知れない、と杉山さんのご発表を拝聴して考えた次第である。

渡部美穂子さん(話題提供者)は、宗教心理学的研究では代表的となっている質問紙調査を、ご自分の研究成果(大学生を対象とした宗教と死生観をめぐる調査研究)の中から紹介して下さった。基本的には、「本人の宗教行動、宗教観他者の死への態度(他者の死観)が、本人の死への態度(自己の死観)に影響をあたえる」という「死生観形成モデル」の検証を内容とするものであった。宗教が人間の究極的問題の解決の

営みであることを考えあわせると、心理学の分野で最近多くみられるようになってきた死生観研究は、宗教心理学が本来その研究対象範囲としている研究が徐々に活性化してきたのだ、と捉えたほうがよりの確であるようにも思われた。渡部さんの今回の調査では、宗教行動および宗教観が死に対する苦痛・恐怖や死からの逃避に対して抑制的に作用すること、「身近な人」の死を尋ねた設問に対して回答者の13%が「ペット」と回答していること等、大変興味深い結果が示された。生物を含め自他の死は、もっとも普遍的な現象の1つであるから、そこには実に様々な、ありとあらゆる状況 典型的には病気か事故かといった死因の多様性が挙げられよう が、複雑に折り重なっているであろうことは想像に難くない。こうした複雑な現象をまえにして、さしあたって小規模な仮説モデルを立てておき、質問紙調査による検証を繰り返しつつ人間の心理行動プロセスの大枠を把握する、という手法は、それ自体として意義をもつと考える。一方で、仮説モデルの柔軟な修正や、個々の人間の体験に焦点を当てた研究(ナラティブ研究など)による検証など、様々な方向に展開していくことも今後可能であろう。

筆者(話題提供者)は、面接逐語録や自由記述などのテキストデータの分析に有効であることから最近注目を集めつつある、形態素解析ソフトの紹介をおこなった。発表のねらいとしては、「こういう便利なソフトがあります」という実践的な紹介をするところにあったのだが、「質的研究・量的研究」という、すでに研究発表会全体に通低されつつあった認識枠からは、少しずつ感じていた感は否めない。とくに筆者が扱ったデータは、そもそも質問紙法によって得た記述データであるから、レジメにわざわざ「質的データ」と表記しなくてもよかったかも知れない、と反省している。心理測定尺度を構成するときに、まず研究対象に関する自由記述を収集し、その自由記述の分類整理作業を通して、(数個の下位尺度にまとまることを前提とした)質問項目を考案する、という手法が多く見受けられる。この手法では、自由記述データは、質問項目が考案され

た時点で目的を果たしてしまう。これは或る意味でもったいない話で、自由記述自体の中から、回答者の意識や行動、またそれらを形成する状況要因を可能な限り抽出する手法もありうるのではないかと、日々考えていた。一方、コーディングルールを作成やコーディング作業には多くの労力とエラーが伴うので、博士論文でも自由記述データを扱ったのだが結局手作業であった、困難さを感じていた。しかしつい最近、形態素解析ソフトというものがあることを「宗教と社会」学会の雑誌で知り、実際に使ってみて大変有効なツールであることを実感した。今回の研究発表となったのは、このような分析手法の紹介もまた「研究方法」の展開にとって重要であろう、との判断からであった。

指定討論者を務めてくださった堀江宗正先生、金児曉嗣先生、ともに、それぞれの話題提供者の発表に対する的確に、また大局的な視点からの討論をいただき、とても感謝している。とくに堀江先生からは、「研究の今日的意義への関心、社会的位置付けへの感受性が薄いのではないかと」のご指摘をいただき、大いに考えさせられるところとなった。この点について短く述べておきたい。

それぞれの研究がもつ今日的・社会的意義について自覚的であることは、同時代研究でもある心理学にとって重要な点であると思われる。ただ、「すでに『オウム以後』ではない」とでも表現すべき最近の人々の忘却ぶりを見ると、「オウム以後」だから、とはいいいくいかも知れない。もちろん話題提供者も、オウム真理教事件や「カルト」と呼ばれる集団の問題について、無関心であるというわけではないだろう。筆者についていえば、しかしながら、(1)すでに多くの研究者が取り組んでおり、かえって宗教社会心理学の「主流」にさえなりつつあること、(2)宗教概念

がカルト概念に矮小化される危険性があること、(3)日本の宗教文化の中で(無自覚的にせよ)生きる人々の宗教性にこそ焦点を当てる必要があると考えていること、などの理由から、主流から一步退いて眺めている、というのが現状である。一方で、社会や人々の意識行動の動向に常に敏感でありたいと考えている。たとえば、最近、教育基本法の改正論議の中で、「宗教的情操教育を積極的に取り入れるべきだ」とか、「改正されると宗教教育が強制実施されるので危険だ」とか、第9条の是非に関連した議論も続いている。この議論には、宗教に関心をもつ人だけではなく、子どもをもつ親や教師も多く参加しており、注目される場所である。発表で筆者が取り上げた研究は、子どもを取り巻く環境(家族・学校・地域など)を宗教的環境として捉えなおすことを目的としていたが、当然ながら学校での宗教の扱いについても調査対象者に訊ねている。また、渡部さんが発表された死生観研究も、家族形態の変化をはじめ、医療技術の進展や高齢化社会といった観点で捉えるとき、まさに社会的問題群のうちでももっとも重要な論点の1つとなる。このように考えてくると、研究対象いかんによってその今日的意義が測られるのではなく、堀江先生が指摘されるように、どれだけ今日的意義を意識しつつ研究するか、という点が大切であることがわかる。

さて、今回の研究発表会のサブタイトルは「宗教意識研究の現在」となった。話題提供者にはそれぞれ、独自の視点をもって実施された調査研究を持ち寄り、その成果を分かち合っていただけのことであろう。大いに学ばせていただきたいと思う。今後も、研究者間の交流が一層はかられ、自主勉強会や情報交換など、研究会の活動が一層充実していくことを願うとともに、微力ながらお手伝いできればと思っている。

## ワークショップに参加して

2回目となるワークショップのテーマは、宗教心理学の方法論であった。発題は、杉山氏と渡部氏と西脇氏によっておこなわれたのだが、ここでは杉山氏の発題をベースにして、感想とコメントを述べたい。

杉山氏は、これまでフィールドワーク、インタビュー、質問紙調査など、さまざまな方法を用いて宗教心理学的な研究をおこなってきた。そのような経験をふまえて、本発表では、宗教心理学にふさわしい研究方法とは何かという問題を探求した。杉山氏は冒頭で「宗教というテーマを扱う上で質問紙法が必要十分であるとは言いがたい」と言明してから、過去に自身がおこなった質的研究を振り返っている。そして、調査者の受け入れに関して微妙な緊張が生じる新宗教の教団というフィールド自体の問題から、「場」に関する基礎的な記録がとれず、結果として論文にまとめ切れず、質問紙法に移行したという舞台裏が明かされる。杉山氏によれば、論文にまとめる際に重要なのは、客観性の問題である。これを広い意味での説得性ととらえるならば、調査者自身のリフレキシビリティとその開示が重要であるということになる。そして、このことは、質的研究においても量的研究においても当てはまるとされる。

杉山氏は、客観性の問題に触れた所で、「客観性とは何か(そもそもそれがあろうのか)」という問題はさておき」と述べ、その上で上記の通り、議論の説得力のためにはリフレキシビリティが大切とする。私見では、純粋な客観性なるものは質的研究においても量的研究においても確保されえないものである。なぜなら、調査者が用意した概念やカテゴリーそのものに、対象への先行理解が含まれてしまうからである。また、調査そのものが対象に働きかけ、対象を変えてしまうことも、実際の調査では避けられないことである。そうであるならば、すでに調査者がもっ

## 宗教心理学の研究方法

堀江宗正(聖心女子大学)

ていた先行理解が、調査を通してどのように変わったかを反省的に開示することしか、われわれにはできないであろう。質的研究法は心理学では最近注目を浴びてきた方法かもしれないが、文化人類学や社会学ではすでに膨大な蓄積がある手法である。そしてそこでは上に述べたような認識は当然のことと考えられている。杉山氏の結論は、それゆえ私自身にはごくごくまっとうだと思われる。

しかし、量的研究が大勢を占める心理学や社会心理学の分野では、このようにラディカルな物言いは穏当ではない。“純粋な客観性はなく、主観同士の関わりとその変化を記述することのみが、質的研究のみならず量的研究においてすら調査者に残された選択肢である。”もしこれが本当なら、現在おこなわれている心理学や社会心理学、そして数量社会学における量的研究は、根底から変更を余儀なくされてしまう。一方、文化人類学において、こうした見解はここ10年来は研究者の常識となっている。宗教学や社会学でも、若手の研究者のほとんどは上の見解を理論的前提としてはよく理解している(このような見地に立った研究を具体化しているかどうかはともかく)。

このような見解が受け入れられる分野と、理解すらされない分野との隔たりは今日非常に大きい。杉山氏は「客観性とは何かという問題はさておき」とお茶を濁したうえで、リフレキシビリティを重視する上のような穏当な主張をするわけだが、これは、量的研究が大勢を占める心理学や社会心理学に属する研究者としては、目配りのきいた表現である。

ところで、調査を通して調査者の主観が被調査者の主観とどのように関わり、どう変わったかを開示することが、調査研究のプレゼンとして結実するというのは、まっとうではあるが、他の人文社会系の分野ではすでに当たり前の認識である。われわれがさらに問題にしなれば

ならないのは、宗教心理学という分野において、質的研究と量的研究がどのようなものになるのか、メリットとデメリットが何であるか、具体的にこれから開拓されるべき領域としてどのようなものがあるか、ということである。

ここではごく簡単に私見を披露させていただく。まず、私は量的研究と質的研究との間に本来的な違いがあるとは考えない。先にも述べたように、自らがすでにもっている概念やカテゴリーや価値判断や臆見が、対象(あるいはもう一つの主観)との出会いにおいて、どのように変化するかを記述することが、どちらにとっても本来は中心的であると考え。その上で、もし質的研究と量的研究において何らかの違いがあるとしたら、それは「縮尺」の違いであろう。すなわち、「宗教」なるものを、量的研究は巨視的にとらえ、質的研究は微視的にとらえるということである。もちろん、両者の違いは縮尺の違いなのであるから、その中間的な研究も存在してしかるべきである。

しかし、今日の宗教理論の見地からは、巨視的な量的研究の限界が明らかに見えてくる。あるものを「宗教」現象としてとらえること自体、対象を一面的にとらえるのみならず、対象を「宗教」として仕立て上げることにもなる。このような宗教概念批判論は90年代以降、宗教研究者がつねに意識しなければならないものとなっている。西洋以外の地域の宗教を考えると、宗教概念の押し付けとその影響が極めて顕著であるからである。これは日本でも同様である。今後の日本宗教の研究者は、長年にわたって日本人は宗教という概念をもたなかったし、現在われわれがもっている宗教概念はしょせん借り物に過ぎないということをふまえなければならないだろう。

そうした理論的状况の中で、宗教に関して量的研究をおこなうことの限界を、調査者は十分に自覚しなければならない。質問項目を作ること、選択肢を設けること、その行為のすべてに、研究者自身の宗教観・宗教概念がどのように映しこまれるのか、それによって対象の複雑さが

どれほど縮減されるのか。もちろん、それはある程度は仕方なく、そのような問題があるからといって量的研究を放棄するべきだというのは乱暴であろう。しかし、縮尺の大きい巨視的研究にできるのは地勢の把握であって、それだけでは見えないことも存在する。こうした限界をふまえておかなければならない。

質的研究と量的研究を縮尺の違いとしてとらえることは、一般的な方法論としては是認されやすいものである。だが實際上、ことに宗教心理学において、この二つの方法のそれぞれの限界が当の研究者によってどの程度自覚されてきたかは、はなはだあやしい。むしろ、個性記述的で微視的な質的研究が、宗教一般を語るのに利用されたり、法則定立的で巨視的な量的研究が、微細な現実まで解き明かすと期待されたりしてきたのではなかっただろうか。どちらも心理学的還元主義として、宗教心理学以外の宗教研究の立場から論難されてきたものである。この二つの陥穽にわれわれは意識的でなければならない。

ところで、私の個人的な立ち位置についても説明すべきだろう。本研究会のメンバーの多くは実証的な心理学的方法、主に質問紙法で、宗教現象にアプローチするものである。これはまったくの個人的な見解であるが、宗教社会学との違いを考えるのであれば、宗教心理学の成果、とくに臨床心理学的な知見に顕著な成果とは、宗教現象の個別性の認識ではなかったか。たとえば、同一の宗教を信じている信者であっても、その神表象は決して同一ではなく、それまでの経験や対人関係に大きく左右されるという知見などである。このような認識は、教団宗教の力が弱まり、個人的なスピリチュアリティの探求が目立つ先進国の宗教状況を把握するためには、必須のものといってもよい。現在スピリチュアリティを対象化する研究は宗教社会学において盛んだが、概況を俯瞰するものが多い。それに対して、宗教心理学の独自な貢献として望まれるのは、宗教的個人において、そのライフヒストリーと複数の宗教的言説がどのように相互作用しているかを記述すること、可能ならば

その相互作用の一般的傾向性を明らかにすることではないだろうか。

もっとも心理学と社会学を対置させるのは、ある意味偏狭な立場であるとも言える。なぜなら、心理学と社会学は方法論のレベルで接近しつつあり、また宗教社会学を標榜する研究者が現在増えつつあり、実際に最近の宗教心理学においては宗教社会学の知見も重要な先行研究として参照されているからである。

しかし、ポスト「宗教」(実体的定義としてのみならず機能的定義の概念としても)という状況の中では、「宗教」全般を量的研究によって把握することには無理があり、微視的な質的研究による宗教現象の多元性や個別性の把握を蓄積し

ていくことこそが、宗教心理学に望まれることなのではないだろうか。

今回のワークショップに参加して気掛かりになったもう一つのこと、以上のような宗教研究者を取り巻く状況について、発表者があまり意識的でないように感じたことである。オウム以降、教団宗教のプレゼンスが弱まり、かわって「癒し」ブームが起り、心理的トラウマに注目が集まり、スピリチュアル/スピリチュアリティという言葉が流布するようになっている。このような状況に宗教心理学がどのように関与できるのか、そのためにはどのような方法論がふさわしいのか、このような問題意識がもっと見られてもよかったのではないだろうか。

---

## 特集1:「宗教心理を研究すること」に対するリプライ

第2号では、多様な立場から「宗教心理を研究すること」と題して執筆していただきました。多様な立場からの提言であったために、すべてを包括的にリプライするのは非常に難しいものであります。そこで、第3号のリプライにおきましても、執筆者の立場から改めて宗教心理学的研究についてどのような捉えているのかを中心に執筆していただきました。第3号を通して、さらに宗教心理学的研究を考える良い機会になれば幸いです。

### 宗教の心理学的効用

齋藤耕二

「宗教の心理学的効用」という表現は、Argyle, M.(2000)の宗教心理学のテキスト中の一章のタイトルであったと思いこんでいた。しかしこの本に当たってみるとそのような章は見あたらない。Beit-Hallami, B.の共著(1997)では巻末の二章が「宗教性の効用(The effects of religiosity)」に当てられていて、個人的水準と集団的水準に分けてさまざまな研究について展望がなされている。前書ではこの二章に対応する内容が異なるタイトルで納められているので、この二つの本では「宗教の効用」がきわめて重要な位置を占めているとみることができる。

後書の「宗教性の効用」は、先行している「従属変数としての宗教」に対応して構成されているように読み取れることからすると、宗教を目的

変数としてジェンダー、年齢、階級、コミュニティなどを説明変数にした研究と「非宗教的な変数」を目的変数としているが説明変数に「宗教に関連した変数」を取り上げた研究を、この本では対比させていることになる。

また心理学で宗教を研究の対象とした時の宗教をどのように規定するのかということは、それ自体複雑で難しい問題である。心理学的視点から宗教を研究対象とするとき、宗教やそれに関連した変数を目的変数とするかあるいは説明変数とするかは検討に値することがらに思われる。

宗教やそれに関連の深い変数が目的変数であるときには、説明変数がどのようなものであるとしても宗教を対象とした研究とみることができる

だろう。しかしながら目的変数が宗教とは直接的な関連を持たない分野のものである時には説明変数に宗教と関連している変数が選ばれたとしても必ずしもそれが宗教の効用を示すものとはならない場合が生じてくる。

Argyleらの本で、宗教とは直接的に関連していない変数を目的変数とした研究で取り上げられている変数をみると、適応、生活満足度、幸福感、ソーシャル・サポートなどから精神的障害にいたさまざまな心理学的変数が研究対象となっている。こうした研究に並べて、身体的健康やさまざまな病気で死亡率、平均寿命といったきわめて身体的な変数を目的とした研究が多くあげられている。

自殺、犯罪など社会学の変数を取り上げた研究もあって、宗教の及ぼす影響の幅広さが認められる。このような目的変数の多様さを眺めていると宗教心理学的あるいは心理学的アプローチと呼べる枠組みがどうもあいまい、多義的に思われてくる。

話を簡単にするために客観的ではっきりしている例として身体的健康を取り上げてみよう。聖職者では死亡率が低く、従って寿命も長いとされている。プロテスタントはカトリックよりこの傾向が顕著で、19世紀では現代よりもこの傾向が強いとされている。もしこの傾向がキリスト教文化圏を越えてイスラム、仏教などの世界宗教をふくめて、さらにごく限られた地域に存在する民俗宗教にまで一般化であるという可能性が明らかになるならば、それは宗教の持つ効用の一つを示すものといえるだろう。さらに、特別な宗教者という枠を超えて、一般の信者についても

宗教的な人々ではそうでない人々に比べてより健康的であることを示しているいくつかの調査結果をArgyleは挙げている。

これらの研究はほとんど相関分析の水準にとどまっていて有意な関連が存在していることを明示している場合であっても二変数の間を結ぶプロセスやメカニズムに踏み込んで詳しく検討されていることがない。目的変数が心理学的ではない時であっても媒介変数として介在している可能性があるし、また説明変数として選ばれた宗教関連変数がいくつかの社会・文化的変数と交絡していることが当然予想される。宗教の本質的効果のみをみるためにはこのような変数の統制が求められることになるだろう。

振り返ると、現在我々が宗教心理学的研究による知見として利用している成果は全てというのは言い過ぎかもしれないが、ほとんどは西欧的、キリスト教的コンテクストを背景とするものである。特定の宗教を超えて一般化できる宗教の本質を探ろうとするならば、比較宗教的視点からの検討が必要になるだろう。比較宗教学が固有な研究領域として認められているように、比較宗教心理学と名付けることのできる領域を築き上げることが宗教心理学のこれからの課題となることだろう。

個人の内部での宗教や信仰の機能や効用を明らかにしようという試みは、複雑で多面的な宗教現象を対象にした研究の中で、心理学的視点からのアプローチにおいて特別な重要性を持つと考えられる。また急激な社会変化にともなって変化してゆく宗教の本質を探る有効な糸口となるのではないだろうか。

---

## 「宗教心理を研究すること」に対するリプライ

高橋正実(ノースイースタン大学)

ニューズレター2号を読んで感じたことが二つあります。一つは神戸大の岡村さんがごく普通に抱く意見、「研究者によって宗教の定義が異なるので混乱してしまう。」について。もう一つは鳥取大の安藤さんや藍野大の河野さんが何気

なく言い切る「宗教的なもの(スピリチュアリティ)」についてです。僕にとってこれらは実にややこしく関連していて、それと同時にこの分野全体(ここではあえて宗教心理学というのを避けています。下記参照。)の将来の方向性に関する

重要な点だと思います。

まず、宗教という言葉の定義ですがアラムさんがおっしゃるように、インドネシアと日本に見られるような異文化での解釈の違い、または河東さんが言うようなフロイト心理学と歴史学のような異分野での解釈の違いのように、「宗教」を研究している人の数だけその定義・解釈があるように思われてきます。勿論、心理学の分野ではジェームスやオルポート等の理論に沿った要因モデルをたてたり、教会や神社仏閣を訪れたりする頻度を調査したりして「科学する」わけですが、それでもひとたび論文で「宗教にはこれこれの作用がある」と言い切ってしまうと、「宗教」という概念の包容的な性質からかあたかもその「宗教」というのは読者ひとりひとりが持っている独自の定義とあまりかけ離れたものではないように思う傾向があり、その結果誤解が生まれてしまうのではないかと懸念します。

このような傾向に最近追い打ちをかけ同分野を混乱させているのが二点目の宗教とスピリチュアリティの関係です。河野由美さんがおっしゃるによく1999年のWHOの見解に「スピリチュアリティ」が取り入れられたことが同分野の研究の増加理由ではないかと思われがちですが、実際は欧米の日常会話で使われている「スピリチュアリティ」という言葉が80年代後半から心理学を中心とした各分野でひんぱんに使われ(研究され)はじめたことが反映された結果がWHOだったと思います。さらにスピリチュアリティという言葉が一般の会話に浸透している欧米でさえ、これらの概念のより包括的な定義を見出そうと、この二つの概念の関連性を明確にしようとする研究が少なからず行なわれています。例えば、これら二つの概念に対するキリスト教圏のノルウェーとアメリカ国内の定義は全く違っているとか(Stifoss-Hansen, 1999)、アメリカ国内でもアフリカ系アメリカ人の解釈は他の人種の解釈と比較してユニークであるとか(Overton & Takahashi, 1999)、様々な比較研究がなされています。我々も日米の3世代を巻き込んで宗教とスピリチュアリティがどのように理解されているのかという研究を行ないましたが世代間、

文化間でその定義に大きな隔たりがあったことは確かです(Takahashi & Ide, 2003)。

一方、日本においては京大の宗教哲学研究室や、キリスト教系の一部の臨床研究者が歴史・哲学的/宗教的見地から宗教とスピリチュアリティの関係についての議論を進めていますが、心理学の分野または一般のレベルではまだまだその関係は明確にされていないのが現状です。これはアラムさんがおっしゃるように、戦後の日本は宗教やスピリチュアリティを「個人の領域」から追い出してきたことが一因かもしれませんが。もしかするとこれらの概念が一般意識のレーダーからかけ離れすぎたことがC. Taylor (1991)のいう確実性の領域 (horizon of authenticity)の崩壊に荷担し、コミュニティー意識の低下等、近年の凶悪犯罪の増加等に関連しているのかもしれませんが。

ただ、私見ですが日本は今でも大変スピリチュアルな国だと思います。それは茶道の心であったり、先祖を敬う心であったりして、例えばアフリカ系アメリカ人の言うところのスピリチュアリティとは異質のものですが、その根底にはエリクソンやネオピアジェ派などに共通する側面もあるのではないかと思います。そういう理解の上で、ただスピリチュアリティを英語から直訳するのではなく、日本という風土と既存の理論的枠組みにも沿った、わが国独特の理論構築が必要だと思います。それが心理学者や一般の人々により明確な枠組みを提供し、わが国のスピリチュアリティの空洞化("spiritual vacuum")という現状に警笛を鳴らすことになるかもしれません。

「何をいまさら」とおっしゃる方もいると思いますが、こういう議論には大変重要な意味があると思います。ひとつには、行動心理学の呪縛から解放されつつある心理学全体の風潮のなかで、我々がヒトのココロ、またはその存在理由のある意味形而上的な物質レベル以上のものの「何か」に求めているということです。特に高齢化現象が進む中で中高年の方々(我々も含めて)の中にこの「何か」がヒトの心理的健康を維持するカギがあるという認識がされてきたので

はないでしょうか。ただそれは松田茶茶さんが懸念するように同分野が「形而上的な物議」に終始するというものではありません。たとえば、スピリチュアリティーにも深く関連する「叡智」の分野でも1970年代までは「形而上的」すぎる等という理由で心理学では取り扱われない概念でした(Takahashi & Overton, in press)。しかしその後、哲学/歴史/宗教的見地から幅広い議論がなされ、また数多くの方法論が論じられ、その結果として様々な経験主義的心理学研究がなされてきました。これと同様、心理学における宗教・スピリチュアリティーの分野でも京大宗教哲学研究室で行なわれているような奥深い議論、既存の枠組みの柔軟な解釈、そして新しい理論構築を踏まえて方法論等の応用面につなげていくことが大事なのではないかと思いません。

「宗教」と「スピリチュアリティー」の概念を明確にしなければならないもう一つの理由はこれらの政治的な意味合いです。たとえば数年前にアメリカのブッシュ大統領が政府の基本政策の一環として「信仰に基づく発議」というものを唱えました。これはホームレスの人々やエイズ患者等に対する援助を米政府が「信仰に基づく団体」を通して行なうというものですが、これは政教分離のアメリカでは綱渡りにも近い政策です。ところがこの政策についての大統領のスピーチや政府の書見書などでは、いたるところで「信仰」と「宗教」と「スピリチュアリティー」がとっかえひっかえ使われています。さらに9/11以降はイスラム教が弾圧されるなかで、これら「信仰に基づく団体」の多くがキリスト教に関連しているために話がよけいにややこしくなる始末です。もちろんアジア諸国を巻き込む日本の総理大臣の靖国神社参拝問題においても、「宗教」や「スピリチュアリティー」の解釈が戦後50年以上曖昧にされてきた結果だと思えます。これらの誤解、プロパガンダによる翻弄を避けるためにも宗教とスピリチュアリティーという概念を明確化する

ことが必要だと思えます。

最後に「宗教心理学会」という名称ですが、確かに呼びやすく、漢字六文字でスッキリした感もあるのですが、研究分野・内容をより正確に反映させるため、WHOの提唱や諸団体の名称には「スピリチュアリティー」という言葉がふくまれていること、またいくつかのジャーナルでも既存のタイトルの「宗教」を「宗教とスピリチュアリティー」と名称変更している等の傾向も踏まえて新名称にするか、または副題をつけくわえる(例:「宗教心理学研究会:「宗教」と「スピリチュアリティー」を考える会」)等ひと工夫付け加えてはいいかがかと提案したいと思います。

#### 参考文献

- Overton, R., & Takahashi, M. (November, 2001). Black spiritualism: The women of the Great Migration (1920-1970) and their legacy. In C. M. Mehrotra & M. Takahashi (Chairs). Cultural perspectives on spirituality and aging. Symposium conducted at the 54th annual meeting of the Gerontological Society of America, Chicago, IL.
- Stifoss-Hanssen, H. (1999). Religion and spirituality: What a European ear hears. *The International Journal for the Psychology of Religion*, 9 (1), 25-33.
- Takahashi, M., & Ide, S. (2003). Implicit theories of spirituality across three generations: A cross-cultural comparison in the US and Japan. *The Journal of Religious Gerontology*, 15 (4), 15-38.
- Takahashi, M., & Overton, W. (in press). Cultural foundations of wisdom: An integrated developmental approach. In R. J. Sternberg (Ed.), *Hand book of wisdom*. New York: Cambridge University.
- Taylor, C. (1991). *The ethics of authenticity*. Cambridge, MA. Harvard Press.



## 宗教心理学を研究すること

仲野好重(大手前大学)

私にとって、宗教心理学との初めての出会いは、聖心女子大学・2年生の時に履修した松本滋先生の「宗教心理学」でした。当時は、その奥深さや視点の広さに気づかないまま、やっとの思いで単位を取得した記憶があります。しかし、熱のこもった松本先生の講義に触れて、「宗教心理学とはなにか面白そうな学問だ!？」という漠然とした知的好奇心を呼び起こされる経験をしたと思います。その後、学部では発達心理学を専攻しましたが、同時に大学生活のほとんどをボランティア活動やフィリピン・スラム地区での体験学習に費やしてしまい、学問的な目覚めは余りありませんでした。しかし、フィリピンのスラム地区などで活動をしておりますと、現地の人々の価値観、特に宗教観を知ることになります。フィリピンは大多数がキリスト教・カトリックの信仰を持っているといわれていますが、現地の土着化したカトリック、換言すれば文化的受肉をしたカトリックの在り様は大変興味深いものでした。

その後、すぐにアメリカのセントルイス大学大学院にて発達心理学を専門に研究することになるのですが、私にとっては指導教授のブレンリー博士との出会いが、心理学をどういう角度から捉えるのかという基本的姿勢に、大きな影響を与えるものとなりました。博士は発達心理学者であり、かつ新トマス派の論客ジャック・マリタンの研究者でもありました。博士にとって私は最後の博士論文指導を行った学生でしたし、また現在も精神的、知的指導を受けている弟子の一人であります。このブレンリー博士が指導の中で常に言っておられたことが、「発達を究極的に眺めていくと、必ず人間としての倫理の問題にぶつかる。この倫理の問題は、現代では宗教の問題である。すなわち、人間発達と宗教をつないでいくものの一つに発達心理学がある」というような言葉でした。そのお陰で、私自身も他学部の授業をいくつか履修することを許され、

その中でも特に面白かったのは、神学部の授業でした。私の通っていたセントルイス大学はイエズス会が経営母体となっており、アメリカの中でも神学部はトップクラスの教授陣と授業内容であったと思います。そこで忘れられないのは、「倫理と宗教」という科目でした。講師はスコットランド人の神学者で、学生は総勢8名ほど、私以外は全員白人でかつ聖職者、修道者といった顔ぶれでした。しかし、取り上げられたテーマは多岐にわたっており、「ジェンダー発達と倫理問題」「発達理論から見た宗教教義の理解」など、15年以上たった今でも興味をそそられるテーマです。

以上のような経験から、発達心理学と宗教の二つの観点が重なり合うところに興味を持ち始めました。そして5年前から「高齢者の生きがい」についての発達研究を日本とドイツで始めたのですが、高齢者を発達的に見つめていくとどうしても「死」という人生の終焉について向き合うことが求められます。私の調査においても多くの高齢者達に、「死」について語って頂きましたし、その裏返しの「生」についてもさまざまな思いが語られていました。それらの言葉の中に、「宗教」が見え隠れしていたことが、私にとって「宗教心理学を研究すること」の本当の第一歩になっていると思います。

私の興味はあくまでも「人間の発達の中に見られる宗教観、あるいは宗教的感覚」であり、これは発達心理学の枠組みの中で考えていきたいテーマです。もう一つ着手しているのが、母校・聖心女子学院の創立者の宗教的理念と教育実践のかかわりについて調べることです。今の自分を構成している土台の部分に、幼いころから教え込まれた宗教的な教育があるような気がするのです。それを、学問的に追求してみたいと思っています。さらには、この現代社会における教育問題の核心に、宗教的要素(特定の宗教を推し進めるという意味では決してありませ

ん)が不可欠なのではないかという私の漠然とした思いを明らかにしたいと思っています。どうぞ読者の皆様、よきアドバイスやご助言を

お願い申し上げます。またこの宗教心理学研究会がますます発展していかれますことを、心からお祈り申し上げます。

## 「宗教心理学」にコミットすること--レスポンスに代えて

深澤英隆(一橋大学)

事務局からのご依頼は、本ニュースレター前号の特集「『宗教心理』を研究すること」に寄せられた諸論考へのレスポンスということでしたが、限られた紙幅で皆さんの多様な関心とアプローチと言及することは困難と感じられました。そこで皆さんのご論考に刺激を受けた上で、上の表題のもとに少し自由に書かせていただくことにしました。

私自身は宗教研究者であり、心理学の教育は受けておりませんが、(宗教)心理学思想史や宗教経験の問題には小さからぬ関心をもっています。私自身は、本研究会は実証性を重んじる狭義の宗教心理学の研究グループとして発足し、そうした性格を核にして活動をしてゆくものと考えていました。私自身は、そうしたアプローチを取ることありませんが、そうした研究の成果には少なからぬ興味があり、お誘い頂いくまみに、会員リストに名を連ねた次第です。しかし、過去のニュースレターの記事を読みますと、本研究会の多くの方が、宗教心理への多様なアプローチの交流や対話ということの必要性を感じておられるようです。もっともそこにはまた、ペースペクティブやパラダイム上の対立や相互理解の困難さも当然ながら伏在していると考えられます。この点は、本誌第1号の報告で堀江宗正氏がつとに指摘されている通りです。

宗教心理に言及し、これを核心的語彙とする言説を仮に宗教心理言説と呼ぶならば、この宗教心理言説には、さまざまな形式やジャンルのものであり、それらは相互に影響し合い、また競合しあっています。その際、宗教心理というものが客体的にあり、それを指示する言語や言説がある、という映像にとどまる限り、そこにはこの客体をいずれの言説がもっとも正確に写して

いるか、という評価の観点が拭いがたく残ります。実証的立場は従来、みずからを、宗教心理言説のうちでもっとも客観的「真理」に近いもの、あるいはそうした真理に接近する手だてを方法的に備えたものと表象してきたと思われま

す。とはいえ、実証的な科学性を固守するアプローチと、そうしたディシプリンの基本概念に反省を加え、場合によってはそれらをデコンストラクトしてゆこうとの立場の相克は、宗教心理学にも及ばざるをえないものと思われま

す。両者がどう媒介されるのか、あるいは相反したままなのか、あるいはいずれかが他方を無効化するのか、なおその帰趨は定かではありません。私見によれば、科学主義的言説にせよ、脱構築的なそれにせよ(あるいはその中間のような構築主義的態度にせよ)、複数のアプローチ=言説が並び立つのは不可避であり、またそこに積極的な意味もある。しかしあらゆるアプローチ=言説は、自らの真理・妥当性請求の限界を自覚し、また自らと異なるアプローチ=言説との差異に敏感であることによって、また自己を差異化してゆかねばならない、と思われま

す。これは確かにあまりにフォーマルな条件を述べたにすぎないのですが、複数のアプローチ=言説の統合理論などはなく、それらの対決・対話や媒介は、そのときどきの具体的な論証の対峙の場面で遂行的にかたちをなしてゆくほかないだろうと思っています。ちなみに私自身は反省性を必ずしもリニアーに進行する(地上の誰かが、ある分野/問題で、反省性の先端にいる)ものとしては表象していません。実証主義的概念使用は、たしかにしばしばナイーブな客観主義的構制を取りがちですが、徹底的にレフレクティブな思考も、いずれにせよ論証のリミットを形づく

る限界概念をもたざるをえないわけで、そうした思考がまた例えば生 = 制度の形成やサンクションとより密接な関係をもつ実証主義的知 = 実践にある仕方では凌駕される、ということも生じうるわけです。もちろんその瞬間にまた、あらたな対抗的デコンストラクションが作動せざるをえないのですが、実際のところ、宗教心理言説の総体は、さまざまな存在性格において考えられた宗教心理の概念を援用する、さまざまな意図と実効性をもった言語ゲームの束と見ることができそうです。そのなかで「宗教心理学」にコミットする、というのはどのようなことなのか。

心理学という学的制度・方法のひとつの下位分科としての宗教心理学がまずは本研究会の中核をなしていることは明確であって、方法論的合意がそのまま実在論的真理の前提と錯視されない限りにおいて、私はそうした限定性は生産的でありうる、と考えます。同時に(そうした合意共同体の外部にいる身としては)、この狭義の宗教心理学が、「宗教学的宗教心理学」にとどまらず)宗教心理言説一般との接触と競合のなかでどのように変容しうるか、ということにも関心があります。例えば、宗教心理が言語報告を媒介にして接近されざるをえないこと、あるいは言語報告から宗教心理的なるものの存在がはじめて構築されるという事実は、そうした

変容をうながす重大な要因のひとつでしょう。質問紙などを用いた実証主義的手法からナラティブ論への転身を自ら記したDavid Yamane氏の論考(Narrative and Religious Experience, in: Sociology of Religion, vol.61, 2000)などは、この文脈で注意を引きます。またなお「宗教経験の学」を志向するYamane氏の議論のさらに外に、(S.Katz以来のいわゆるconstructivismにもなお残る)認識論・客体論的問題構制を解体してゆこうとの系譜学の立場があり、宗教経験論や神秘経験論における論争状況をつくっています。またこうしたソリッドな問題追求とは別に、社会 / 個人意識に介入し、さらに遂行的にそれを喚起しようとする宗教心理論や霊性論の多彩な言説群があります。こうしたコンステレーションのなかで、宗教心理学が閉ざされた真理請求を追求するのか、それとも他の宗教心理言説との接触へと自らを開きながら、学科としての固有性を更新してゆこうとするのか。私自身が宗教心理学にコミット感を抱くこと背景には、宗教心理論・心理学が宗教の自己理解との相互作用のなかで辿ってきた歴史的過去への関心があるのですが、同時にこの後者の宗教心理学の変容への期待感も、そこには交錯しているように思われます。

---

## 特集2: 今後の宗教心理学研究会における活動・運営について

宗教心理学研究会が設置されて、1年余りを経ました。最近では、組織の充実や研究会の方向性などについて話し合われることも増えてきました。それらのことを踏まえて、3人の方々に、これからの宗教心理学研究会について執筆していただきました。

### 宗教心理学の社会貢献とは

ミカエル・カルマノ(南山大学)

"For every complex problem, there is an answer that is clear, simple, and wrong." (Henry Louis Mencken)<sup>(1)</sup>

筆者は、南山大学の共通必修科目「キリスト教概論」(いまは「宗教論」という名称に変わっ

た)を担当していた時、ひろさちや著、「どの宗教が役に立つか」<sup>(2)</sup>をテキストに使ったことがある。「御利益宗教」に疑問をかける著書で、履修生の間でも評判が良かった。

「宗教心理学研究会における活動・運営」とい

う課題を見て、筆者の頭に浮かんできたのはこの本のタイトルだった。宗教心理学からどのような「御利益」を期待できるのだろうか。「宗教」が絡んでいる問題は最近非常に目立つようになったが、いわゆる「宗教問題」を直面している人々や社会にとって、宗教心理学は何の役の立つのだろうか？

宗教心理学の専門家の知識が必要とされる問題は多い。自爆テロを奨励しているように見えるイスラム主義のジハード論は注目を集めている。(3) 科学の進歩の影響で衰える筈の宗教は健在であるだけでなく、イスラム教以外の大きな宗教(ヒンドゥー教、キリスト教)においても、厳粛な「根本主義」に多くの人は心が惹かれている。フランス革命から始まった「世俗化」の勢いは逆戻りがあり得ない歴史の流れだという「常識」に、最近の社会学的研究は疑問をかけた。(4)

いうまでもなく、これは宗教心理学だけで対応できる問題ではないが、文化、政治、芸術と密接な関連がある宗教的現象を心理学の観点からも研究することは急務だ。たとえば、宗教が有する「求心力」を心理学的に解明する必要がある。杉山幸子氏の「新宗教とアイデンティティ」はまさにこのような要求に応える本だろう。やはり、自分の研究分野が社会に貢献していることは、「象牙の塔」の居住者として社会から白い目で見られがちな研究者にとっても喜ばしいことだ。

しかし、筆者は一つ危惧の念を抱いている。社会に貢献しようという努力は落とし穴になりうのではないかと。原子・粒子の研究の最初

の応用は原子爆弾だった。宗教心理学の応用は物理学ほどの危険ではないだろうが、悪用されることは十分考えられる。

宗教問題に直面して、人は理解しやすい問題提起、そして答えを求める。たとえば「イスラム教徒の心理はどこが違うか」、と。このような質問に対して容易な答えを与えないこと、むしろまず適切な設問を紹介することは、宗教心理学を研究する者の責任なのだ。宗教や心理をより深く理解することは必ずしも即座に応用できる具体策につながらない。専門的知識への期待感が過大評価になれば、どの分野でも望ましくない結果が出る。

言うまでもなく、宗教心理学にも応用出来る研究結果はあるが、応用の前提は宗教を信じる人の心理のcomplexityを理解しようとする心構えだと私は思う。宗教心理学の社会貢献は容易な、誰でも使える「マニュアル」ではないいや、そうであってはならない。本当の社会貢献は、宗教の心理、宗教を信じる人の心理をより深く理解しようとする人の役に立つ基礎研究ではないだろうか？

(1) 1880/1956, アメリカの評論家。

<http://www.mencken.org/>を参照

(2) 新潮社、1990

(3) 今年、私のゼミ生はそれを卒業論文のテーマとしていた。

(4) Andrew M. Greeley, Religion in Europe at the End of the Second Millenium. A Sociological Profile. New Brunswick: Transaction Publishers, 2003を参照。

---

## 今後の宗教心理学研究会における活動・運営について

河野由美(藍野大学)

まずは、先日の科研費申請におきましては、急な提案にもかかわらず、多くの方の賛意が得られ、無事に申請書を提出できましたことを、この場を借りて心より御礼申し上げます。多数の会員の方が共同研究参加への志をお持ちであることがわかりましたのは、今回申請において

の収穫であったと思います。深く感謝するとともに、今後の宗教心理学研究会の活動に関して大きな希望を得ました。

なお、今回のニューズレターでは『今後の宗教心理学研究会における活動・運営について』の意見を述べるよう事務局の方からご指示を頂い

ておりますが、私自身、宗教心理学分野の研究におきましても、研究者としても、未熟者であるため、意見と言えるものは述べられません、今回の科研費申請の事務担当者としての反省を踏まえ、今後の会の活動・運営に関する希望を述べさせて頂きたいと思っております。

まず、会の活動・運営を考える上で重要になるのが、その会の設立「目的」や、会員の方々が何を求めて入会しているのかを考えることだと思います。

宗教心理学研究会規約第2条[目的]においては、「本会は、宗教心理学的研究の発表、議論の場を作り、宗教心理学的研究の活性化をはかっていくことを目的とする」と記されております。その目的を達成するために、日本心理学会年次大会でのWSの開催、会報の発行、ML・HP掲示板での情報交換、研究プロジェクトとして現在、「宗教心理学関連文献目録作成」と「海外ジャーナルの抄録翻訳」の2つが行われています。私の勝手な感想で恐縮なのですが、設立されてわずか1年の間に研究会は随分と整備され、多くの活動がなされていると感じております。これもこれまで、惜しみなく多くのご尽力を下された、事務局の松島さんや西脇先生のおかげであると、心より感謝の意を表したいと思います。ただ、長い目でこれからの会の活動・運営を考えてみますと、少数の方の献身的なご尽力に頼ってばかりはいられないと思っております。従いまして提案ですが、来年の「WS」を事務局の仕事と分けたように、「会報の発行」や「プロジェクト」に関しても分担してみたいかがでしょうか。ただ、宗教心理学に関して初心者の私などは、何かお手伝いしたくとも、果たして自分に何ができるのかわからずにいるのが正直なところ。私のように何かできることはお手伝いしたいが、何ができるかわからないので自分からは申し出にくい方も多いのではないのでしょうか。ですので、1～2年の任期で～の担当者を決める。決め方はいろいろあると思っておりますが、立候補がなければ、事務局を通じて依頼するというのも一つの方法だと思いますし、～を部局とし(この機会に他の項目を考え

てみても良いかもしれません)、会員各自にどこを分担したいかを尋ね、各部局にリーダーとサブを置くという方法もあると思います。多くの方のお知恵とアイデアを拝借できればと存じます。

話をもとに戻しますが、研究会入会の動機として私の場合は、宗教心理に関する情報交換を行い、他の研究者と連携して共同研究活動を行う場を求めて会に入会致しました。ニューズレター等を拝見しておりますと、会に対して私と同じような希望を持っている会員の方も少ないとの印象を受けました。の「情報交換」に関してはMLやHPから多くの恩恵を受けております。欲を言えば後、の「共同研究」に関する機会が得られればと非常にありがたいと考えております。もちろん、研究は個人でもできますが、宗教心理学という学問の体系化が確立されておらず、学際的研究が求められる分野においては、自身の専門分野だけでなく他の分野の先生と共同研究することで、大きな学びが得られることも多いと思っております。研究会の会員方は心理学だけでなく、宗教学、教育学、社会学、福祉学等をご専門とされており、学際的な研究するのに好環境にあるのではないのでしょうか。ここに会を通じて共同研究の呼びかけを行うことに大きなメリットがあると思っております。また、会員が会の活動にコミットする機会があればあるほど、会への帰属意識も高まり、会が活性化されると思っております。そうした意味からも、今後の会の活性化をはかっていく上で、会を通じて共同研究や助成金申請の呼びかけを積極的に行っていくことは非常に重要だと思います。ただできましたら、会を通じての研究活動に関しては、透明性があることを望みます。今どのような活動・プロジェクトがなされているのかがわかり、院生の方や学部生の方、参加を希望する者がコミットしやすいようにして頂けるとありがたいです。

今回の科研費申請においての大きな反省点として、参加呼びかけの期間が極端に短く、参加の意向を持ちながらも機会を逃してしまわれた会員の方も多かったことと思っております。科研申請事務担当者として不手際を心よりお詫び致しま

す。今回の反省を踏まえて今後、会を通じての共同研究参加依頼においては、時間的余裕を十分取っていただくことをお願いしたいと存じます。

あわせて科研費申請に関してですが、ご存知の通り近年、国公立大学の法人化や大学機能評価に関連して、研究者は各自で外部から研究費を確保することが求められております。国立大学によっては教員全員が科研費に申請することを義務づけられはじめているところもあると聞きます。昨年度の科研費の採択率は、我々が申請した基盤C一般では22.1%、企画調査では10.9%と、かなり狭き門です。加えて年々、申請数が増加するに伴い、益々倍率は増加していくと推察されます。今回の申請におきましても、採択されることを楽観視できる状況ではありませんが、文部科学省の方針として今年の科研費では特に、「社会的貢献」「社会的応用」に関する

研究を求めていると聞いております。そうした意味では、今回の研究課題は時代の要請と重なるものであると思っております。初回の申請では採択は難しいかもしれませんが、もし今回の科研申請が不採択になっても、今後も科研や各種助成金申請にチャレンジして軌跡を残していくことが重要ではないかと思っています。

はじめに申し上げましたように未熟者のため、不遜なものの言いや、間違った解釈をしているかもしれませんが、会の活動・運営に関する率直な私の希望を述べさせて頂きました。会の今後の活動・運営に関して少しでも参考になれば幸いです。

流れのない川は朽ちて行きますが、小川であればあるほど川の浄化には適度な流れが必要になります。会の活動におきましても、激流や急流になることなく、清流となることを願っております。

---

## 今後の宗教心理学研究会における活動・運営について

西脇 良(南山大学)

時が経つのは早いもので、2003年夏に発足したこの宗教心理学研究会も今年で3年目に入りました。この間、事務局担当者の松島さんをはじめ多くの方々のご尽力により、会員数と活動内容の両面で、大変充実してまいりました。会員数は、2005年1月現在、40名を越えています。またこれまでの活動としては、研究発表会の開催、ニューズレターの発行、メーリングリストを用いての情報および意見交換、などがおこなわれてきました。昨年には本研究会の規約もさだまりました。これに加え、河野由美先生(藍野大学)の呼びかけにより、会員多数参集のもとでの共同研究が計画され、文科省科研費申請に至るなど、着実な前進をみてきました。あらためてこれまでの経過を、本研究会の一員として喜びをもって受けとめております。

さて、会員数の増加および活動内容の進展は、当然のことながら、関連する業務の増大としてもあらわれており、早急な対応が求められてい

るように思います。最近の研究会業務の状況を踏まえると、会員が少しずつ、労力と負担を分かち合いながら、更なる発展を目指す時期にそろそろきているように思います。

そこで、大変僭越ではありますが、研究会設立当初から係らせていただいている者として、今後の研究会の活動および運営について、以下に若干の提案をさせていただきたいと思っております。会員の皆さまの意見交換のための、1つのきっかけとなれば、大変幸いです。

### (1)今後の活動について

すでにある活動の充実 日本心理学会における研究発表会開催、ニューズレター編集発行、メーリングリストおよびホームページ運営、等の活動を引き続きおこない、充実をはかる。日本心理学会研究制度への申請をおこない、活動の一層の認知をはかる。

研究プロジェクトの活性化 これまでの研究プロ

ジェクト(宗教心理学関連文献目録作成プロジェクト、海外ジャーナルの抄録翻訳プロジェクト)に加え、科研費申請をきっかけとして、共同研究の機運が高まっている。今後も、会員による共同研究を研究会として積極的に支援してゆく。そのため、支援の枠組みを具体的にさだめる。掲示板の廃止 現在ホームページ上に、会員以外の人々の情報交換の場として掲示板を設けているが、意図に反した書き込みも見受けられる。そのため、この掲示板を一旦廃止する。情報提供や意見交換などの社会的貢献については、別途方策を考える。

学会の設立 今後5-10年以内に本研究会を発展解消させ、「日本宗教心理学会」の設立を目指す。設立のための準備を、今年から始める。

## (2)今後の運営について

複数運営体制の確立 これまで研究会の運営は少数の会員の努力によって賄われてきたが、活動の進展に伴い、徐々にそれも困難になってきている。そこで、複数運営体制に移行させ、少しずつ仕事を分担するようにする。運営組織および業務内容を、たとえば以下のようにする。

### a)役職および運営組織

会長：(「日本心理学会宗教心理学研究会」の代表者を兼ねる)

事務局：事務局長(「日本心理学会宗教心理学研究会」の幹事を兼ねる)および事務局(若干名)

運営委員会：(会長、事務局長、運営委員5名程度、により構成)

会員総会：(研究会会員全員により構成)

会長および事務局長をのぞいた各担当者(事務局および運営委員)の選出方法および任期については、別途考える(当分の間は推薦のうえ信任、のち、選挙制を導入するなど)。

### b)業務内容

会長：宗教心理学研究会を代表する。会の活動運営全般にわたり適宜助言をおこなう。

事務局：事務局長は事務局を設置し、本研究会

の事務全般を管掌する。また、定期的に運営委員会を召集する。事務局は、事務局長のもとで本研究会の事務をおこなう。必要に応じて担当者をおく。主な業務内容は以下のとおり。

- ・入会および退会事務
- ・会員情報の管理
- ・会計(予算原案・決算書の作成を含む)
- ・広報(ホームページ管理運営など)
- ・メーリングリスト管理運営

運営委員会：会長および事務局長と協力して、本研究会の運営全般にわたり必要な審議決定をおこなう。主な業務内容は以下のとおり。

- ・活動方針の策定
- ・規約に係わる事項の審議
- ・予算・決算書の策定
- ・研究発表会の企画
- ・ニューズレターの編集
- ・研究プロジェクトの企画および支援
- ・会員総会の開催準備
- ・学会設立の準備

また運営委員会は、業務内容の必要性に応じ、担当者または担当チームを任命することができる(「研究発表会準備チーム」「研究プロジェクトチーム」「学会設立準備チーム」など)。各チームは、事務局および運営委員会と密に連絡をとりながら、業務を遂行する。

会員総会：年に1回、総会を開催し、本研究会の重要事項(規約、予算決算書等)を審議承認する。

会費制の正式導入 本研究会の活動の進展に伴い、事務費用などの必要経費も増加しつつある。昨年は(金児曉嗣先生のご助言により)運営費の名目で、1人あたり2,000円の徴収がなされた。今後はさらに、年会費制度を導入することで経済的基盤をかためていくことが望ましい。

提案は以上です。たとえば運営委員会と会員総会との関係など、勉強不足の面が多々あると思います。皆さまからのさらなるアイデアおよびご意見が出ることを願っております。

## 事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第3号が発行されました。発行が予定より遅くなってしまい誠に申し訳ございませんでした。今回の内容は、第2回研究発表会報告と2つの特集からなっております。今後、さらにニューズレターを充実したものにしていきたいと思っておりますので、ぜひ今号に関するご感想をいただければ幸いです。

日本心理学会発行の『心理学ワールド28号(2005年1月15日発行)』の巻頭言において、星野命先生が、「日本の宗教心理学の今昔」と題して、第2回研究発表会について触れられています。そこで、今回の研究発表会に参加して非常に感慨深かったことが述べられています。まだお読みでない方はぜひ目を通していただければ幸いです。

これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

### [宗教心理学研究会の今後の予定]

#### 2005年3月

第3回研究発表会企画決定

#### 2005年5月～6月

日本心理学会研究会制度申請予定

#### 2005年7月

宗教心理学研究会ニューズレター第4号の原稿依頼

#### 2005年8月

宗教心理学研究会ニューズレター第4号の構成・編集作業

ワークショップについて具体的な計画を立てる。適宜、話題提供者、指定討論者、研究会会員間の意見交換を行う

#### 2004年9月10日(土)～12日(月)

(1)日本心理学会第69回大会ワークショップ(第3回研究発表会)開催予定[開催校:慶應大学]

(2)ワークショップ(研究発表会)時に、宗教心理学研究会ニューズレター第4号を発行、配付

発行:宗教心理学研究会

編集:宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当:松島公望[kobo@yf6.so-net.ne.jp]

研究会ホームページおよびメーリングリスト管理・運営

担当:西脇 良[rnishiwk@nanzan-u.ac.jp]

研究会ホームページ

[http://www.geocities.jp/psychology\\_of\\_religion\\_japan/](http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/)